ギルバート・ホワイトにおける生態地域主義の視角

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 生田, 省悟 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17882

ギルバート・ホワイトにおける生態地域主義の視角

生田省悟

〈目次〉

一　〈生態地域主義〉とホワイト―序にかえて
二　『セルボーンの博物誌』―「定住者」と「野外のナチュラリスト」
三　生態系の祝祭―「動物の生活と習性」と「エコノミー」
四　セルボーン―〈教区〉と〈生態地域〉
五　〈場所の感覚〉と博物誌―結びにかえて

一　〈生態地域主義〉とホワイト―序にかえて

環境の危機が声高に論じられるようになってすでに久しい。誰もが出口の見えないまま模索を繰り返すと同時に、あらゆる領域から日々報告される深刻な事態に滅亡の予感を抱くことを余儀なくされる。これこそが、現代が直面する最も困難な状況であろう。しかも、社会問題の多くはその種類と性質の如何にかかわらず、自然環境との関連を準拠枠として評価されるに至っている。ある意味からすれば、環境が社会・文化をめぐる議論のメタ言説になったと言ってさしつかえない。その一方で、とりわけレイチェル・カーソンがあの『沈黙の春』（一九

六二年）で警鐘を鳴らして以来、さまざまなエコロジー思想や環境運動体が出現し、精力的な活動を展開するのと平行して緻密な理論の構築を企てているばかりか、立場や方法論の相違から互いに相対立しては軋轢を生じてさえいることも周知の事実である。このような環境意識の高まりと密接にかかわるエコロジー思想／運動のひとつに、日本でもようやくその存在が認知されつつある〈生態地域主義〉(bioregionalism) を挙げることができる。[1]

生態地域主義は直接にはアメリカの六〇年代後半、いわゆる対抗文化（カウンター・カルチャー）の潮流のなかで草の根運動のひとつとして誕生したものであり、ダグ・エイバリーによれば、その名称自体は急進的政治活動家A・ヴァン・ニューカークにより一九七五年に着想された。また、その主眼は、「生態地域と呼ばれる、生物地理学的に解釈された文化の区域」において住民が「動植物の多様性を回復」させ、「原生自然の生態系の保全・復元を支援」し、さらには「自然景観の生物学的現実との関係において、新たな、相対的に見て恣意的でない人間活動のための、地域に即したモデルを発見すること」にあったという。[2] しかも、とりわけ七〇年代前後からは、エコロジストとして著名なピーター・バーグ、文化史研究者レイモンド・ダズマン、あるいは詩人ゲーリー・スナイダーらの積極的な関与を支柱としながら緩やかな運動体としての理論を洗練させ、今日に至っている。

ただ、現実の場で行なわれる論議にあっては自然・環境はもとより、政治や経済行為など多岐にわたる問題が提起されているため、生態地域主義が何に照準を合わせているのか、あるいは、そもそも「生態地域」(bioregion) とはいかなる概念なのかを正確に把握するのは必ずしも容易ではない。とはいえ、たとえばエイバリーが生態地域主義の歴史を概観した一節には、それらの輪郭を理解するための重要な手がかりが潜んでいるように思われる。

生態地域主義とは、社会的に正当な人間の文化を、それが改変不可能な形で埋め込まれている地域規模の生態系に持続可能な様態で再結合させるという難題に対する返答として進化してきた思想体系であり、それに関連する実践である。この〈再定住〉という野心的な企ては約二十五年間にわたり、いわゆる文明における通常の政治あるいは知の中心地点からは遠く離れたところで入念な形の進展を遂げてきた。都市区域で、雨の多い海沿いの谷で、草原地帯の窪地で、亜熱帯の台地で、生態地域主義者の共同体は労を惜しむことなく、喜びに浸りながら自らの家郷としての領域、すなわち自らの生態地域における文化的、生物物理的自己同一性を学んできたのだ。そうした共同体はまた、この困難の末に獲得した経験の教えを分かち合うべく働き、今や、全地球上に広がる生態地域主義の絆を互いに結びつける網の目を発展させるに至った。(3)

（傍点は筆者）

エイバリーの要約が物語るのは何よりもまず、「再結合」や〈再定住〉に含意される反省の意識であろう。それは、文化と自然とを対立的に認識してきたこと、自然をもっぱら搾取の対象とみなしてきたこと（ひいては深刻な環境危機を招来したこと）を直視している。そのうえで、生態地域主義は政治や社会経済システムの現況批判を展開すると同時に代替案を提示する。すなわち、中央集権制や文化の画一性に対する異議申し立てと、特定の「家郷としての領域」に生きることで獲得される「自己同一性」の主張がそれである。このような視座からすれば、人為的な行政区分によらず、生態系や自然の地形に基づく個々の地域にこだわる過程自体が、個としての人間の確立を促すと同時に多様な文化と「持続可能な」社会を育む契機になりうる。場所と無縁の社会・文化活動は存在しない。むしろひとつの場所に生を営み、同一の空間を共有する自然の事物や環境と密接にかかわることが創造的行為に連結してゆくというのだ。特定の場を前提とし、人間と自然との関係を検証することから獲得される新たな文化への展望。現代エコロジー思想／運動としての「生態地域」主義の所以であろう。

「生態地域」がある特定の地域の地形や生態系を意味すると同時に、そこにおける人間の生、さらには共同体の実質をも指示する用語であることが明らかにされたとき、見逃してはならないのは、〈再定住〉（"reinhabitation"）なる語にとりわけ力点が置かれている事態のはずだ。再びエイバリーの言葉に耳を傾けなければならない。

〈再定住〉とは、過去の搾取によって崩壊させられ傷つけられてきた地域にある場所に生きることを意味する。それは、当該の場所の内部および周囲で働く具体的な生態学的関係を認識することを通じて、その場所に根づくことを伴う。つまり、その場所の生を豊かにし、その生命維持システムを回復させ、その内部における生態学的かつ社会的に持続可能な存在様式を確立させるような活動と社会的行動を理解し、進展させてゆくことなのである。端的に言えば、〈再定住〉とはひとつの生命共同体の構成員となるよう願うことを、そしてこの共同体を搾取してきたという立場を放棄することを必然化するのだ。(4)

ある種の政治的メッセージが浮遊する言説の表層を突き抜けた地点で立ち現われるのは、人間と場所との間に予感される豊かな交渉・関係性への揺るぎない確信と希望に他ならない。ひとつの「場所に根づき」、自然や生態系に関する深い知識の獲得を介することで迎える「生命共同体」意識の覚醒。反省から創造的行為への架橋を表象する〈再定住〉はこうして、生態地域主義の根幹にかかわる認識としての意義を担うのである。

〈再定住〉が具体的な場所に生き、個々の生物や生態系を知ることで、人間と場所との関係性の〈再〉構築を試みる行為を意味するのならば、その実践はいかなる形態を取り、いかなる過程を経るのであろうか。少なくとも、それは長期間にわたる持続的な営みを予想させる。このとき、時間的かつ空間的隔たりはもとより、背景を

なす精神史的脈絡の差異をあえて無視することが許されるなら、十八世紀のイギリスに生きた人物ギルバート・ホワイト（Gilbert White, 1720−93）のうちに、その鮮やかな先駆けとすべき仕事を見ることができるはずだ。

ギルバート・ホワイトはその生涯の大半を故郷の小村セルボーンで過ごした。そして周知のように、牧師補としての職務を遂行するかたわら、身近に接する自然の事物を観察することに無上の歓びを見い出す。博物誌の系譜における不朽の古典、あるいはナチュラリストの聖書として今も高く評価される『セルボーンの博物誌』（*The Natural History of Selborne*）は、そのような人物の日常がもたらした麗しい結実に他ならない。この著作は二人の文通相手に宛てた一七六七年から一七八七年までの書簡をまとめたもので、一七八九年に出版されている。その全篇を通じてホワイトは、「野外のナチュラリスト」という自己規定に由来する実践と個人的感慨とを飽くことなく語り続けてやまない。彼の目指すところが、字義どおりに家郷となった場所セルボーンをくまなく探り、それとの親密な交渉を継続することにあったからだ。その詳細を検証し、現代エコロジー思想／運動としての生態地域主義との接続を試みること—それが本稿の課題である。

二　『セルボーンの博物誌』—「定住者」と「野外のナチュラリスト」

『セルボーンの博物誌』は『セルボーンの故事』（*The Antiquities of Selborne*）との合本で刊行されたが、その序の冒頭部分には、看過できないほど重要な意味を持つであろう文言が仮定法による控えめな形で記されている。「もしも定住者たちが自らの居住する地域に何らかの注意を払い、周囲の事物に関する考えを公にするなら、そのような資料からは完璧この上ない郡誌が導き出されるでしょう」とあるのだ。[5] ホワイトが彼自身を「定住者たち」（"stationary men"）のひとりと暗にほのめかす感覚ないし自負は、単に故郷に永く腰を落ち着けてきたからといった類の理由からだけでは説明しきれない。むしろ問われるべきなのは、「定住者たち」という語

を意識して使用したことが、ホワイト自身の歩みとどのように交錯しているのかであろう。同じく序に現われ、またしても仮定法に託された一節に注目したい。

かりに筆者が、ありきたりな事柄としてしばしば見逃されてしまう創造の驚異に即座に注意を払うよう、読者のどなたかを誘ったのだとしたら、あるいは彼の調査を通じて、歴史と地誌にまつわる知識の境界の拡大に向けてともかく援助の手をさし伸べたのだとしたら、…彼の目的は十分にかなえられることでしょう。

「ありきたりな事柄としてしばしば見逃されてしまう創造の驚異」を丹念に掘り起こし、「知識の境界の拡大に向けてともかく援助の手をさし伸べ」ること、それは「定住者」によってはじめて可能となるし、それが「定住者」の責務であるとホワイトは言うのである。同時に彼の「目的」には、自らの経験を読者が追体験してくれること、自らの著作を辿ることで読者が自分たちの住む教区／村、すなわち共同体のありかたを理解してゆくことへの願望が込められている。家郷に関する理解の広がりと深化こそ、〈定住者〉の感覚を醸成させる過程であり、獲得された新たな知見に基づくことで人間と土地との関係性が覚醒を迎えるという意味での〈再定住〉に繋がるのだから。「定住者たち」という言葉の背後からは、明らかにひとつの場所に傾けられた想いと自然に湧き上がる愛着とが顔を覗かせている。生活する過程で累積された時間の質。『セルボーンの博物誌』は、ホワイト自身のうちに〈再定住〉の感覚が紡ぎ出されてゆく様態を語りかけてくるものでもあるのだ。

ホワイトの〈定住〉感覚が途切れない日常の連続によってもたらされたものであるならば、そうした日常の意義は何に由来するというのであろうか。その答えは、彼自身が提示した言葉「野外のナチュラリスト」に集約される。文通相手のひとりデインズ・バリントンに宛てた第一書簡において、ホワイトは次のように語る。

…と申しますのも、あなたが非常に心の広い紳士であり、ご理解を示して下さる方だと承知しているからです。しかも著者が野外のナチュラリストであることを、すなわち他人の著作からではなく、対象それ自体から観察すべき事柄を得ていることを公言する場合に、とりわけそのように言えると心得ているものです。（B 1）[6]

ホワイトは、特有の控えめな言い回しに託して自らのことを「野外のナチュラリスト」と位置づける。「野外のナチュラリスト」（"an out-door naturalist"）とは、疑うべくもなく一種の同義語反復であり、奇異な印象を与えずにはおかない。だとすれば、あえて「野外の」と強調する執拗な意図のありかが問われるべきであろう。「他人の著作から」といった批判めいた文言が示唆するように、ホワイトは彼が生きた時代における博物誌の趨勢をみきわめながら、自らの立場の正当性を主張したのではなかったか。

改めて指摘するまでもなく、十八世紀の博物誌研究に君臨していたのはスウェーデンのリンネであった。そして、いわゆる人為分類に基づいて、自然界の壮大な体系化を図ろうとするリンネの学説は急速にヨーロッパを席巻してゆく。そうした状況はイギリスにおいても例外ではなく、『セルボーンの博物誌』上梓の前年にはリンネ協会さえ創設されているし、ホワイト自身もまた、手にした標本を検索し、分類作業に専心した経験を語ったり、その意義を強調したりもしている。あるいはまた、この著作からはリンネに対する言及やその説に依拠した記述なども数多く指摘できる。しかしながら、彼はリンネの理論と方法に必ずしも賛意のみを示したわけではなかった。むしろ彼は、自らの目標とすべき地点を分類が自己目的化されるような性格を帯びた知のうちに求めることを拒否する。だからこそ、分類一辺倒に明け暮れるリンネ亜流に対してさりげなく異議を申し立てると同時に、（ここでも婉曲に）自らの姿勢を表明せずにはいられないのである。

ご承知のように、動物学者はたいして意味のない記載と二、三の同義語をあまりにも安易に受け入れる傾向があります。なぜなら、すべての仕事がその人の書斎で行なわれてしまうからです。しかしながら、動物の生活と習性の研究ははるかに骨の折れる困難な課題です。活動的で探究心の強い人々、もっぱら田舎に住んでいる人々でなければやり遂げることが不可能なのです。（B 10）

この一節で指摘された「書斎で行なわれ」る「仕事」は、先の「他人の著作から」が指示する事態と露骨なまでに同一視されている。それとは対極的な位置を占めるはずの「動物の生活と習性の研究」とは、「野外のナチュラリスト」が取り組むべき「課題」の内実を明確に断言したものと受け取ってさしつかえない。さらには念をおすかのように、ホワイトは「もっぱら田舎に住んでいる人々」（またしても複数形！）と付け加えることも忘れないのである。特定の場所に腰をすえた人間にしか見えてはこない動物の秘密。こうした強い使命感に駆られ、ホワイトは自らの力で博物誌の新たな地平を切り開いてゆく。

これまで考察してきた言説から判断されるとおり、『セルボーンの博物誌』の基調をなしているのは「野外のナチュラリスト」という自己規定に他ならない。しかも観察に勤しむ「野外のナチュラリスト」像は、ホワイトの内部では「定住者」という認識と寸分違わず重なり合う。あるいはむしろ、「野外のナチュラリスト」としての生が、結果として「定住者」たることを自覚するに至る道程であったというのが正確であろうか。いずれにしてもホワイトの内部では、故郷セルボーンが自覚された家郷セルボーンへと変質を遂げてゆくための、ある精神／感受性が活発に作用しているのである。その発動を促す要因は、他ならぬ彼自身が掲げた「動物の生活と習性の研究」（“the investigation of the life and conversations of animals”）のうちにあった。

三　生態系の祝祭―「動物の生活と習性」と「エコノミー」

生態地域主義の唱える〈再定住〉にあっては、場所に関する詳細な知識を獲得することが強く求められる。知の集積が、その密度と要する時間の質に比例しながら、場所との親密な関係性に結実してゆくからだ。これが現実にはいかなる形態で進行するのかという局面においても、『セルボーンの博物誌』は注目すべき具体的な事例にこと欠かないが、ホワイトの場合はとりわけ、周囲の生物の織りなす生をつぶさに観察すること、すなわち「動物の生活と習性の研究」が最優先されるべき課題であった。それを裏づける傍証を挙げておくなら、『セルボーンの博物誌』からは「動物の生活と習性」という言葉を先の引用箇所を含め五回（P31、P34、B10、B17、B20）、そして、ほぼ同様の主旨とみなしうる「動物の生活の様態」（"the manner/modes of life of animals"）といった類の表現も五回（B10、B46、B48、B50、B60）、それぞれ抽出することができる。それらの使用頻度が高いばかりか、すべてが一七七〇年九月（P31）以降に集中しているという事実は、ホワイトの営為が次第に焦点を結んでいった経緯を如実に物語っているはずである。

別の機会に論じたことがあるため、[7] 概略のみにとどめるが、「動物の生活と習性」の観察／研究とはどのようなものであったのか。それをあますところなく例証するものとしては、ホワイトが終生愛してやまなかったツバメ属に関するおびただしい記述、たとえばイワツバメの営巣と育雛の観察（B16）などがあまりにも有名である。だが、ここでは「ヨタカ」に関する記載を引用しておきたい。「ヨタカ」のかいま見せる「生活と習性」の一端が鋭く切り取られた箇所だ。

七月十二日、私はヨタカ（*caprimulgus*）の活動を注視する絶好の機会に恵まれました。この鳥がフキコガ

ネの群がるオークの大木の周りで戯れていたおりのことです。その翼の飛翔力は驚異的で、どうかすると、ツバメ属が見せるさまざまな旋回や素早い方向転換にも優るものでした。けれども私を最も歓ばせてくれた事態とは、それが飛翔中に短い脚を突き出し、頭部を曲げては何かを口に運ぶのを一度ならず目撃できたことだったのです。私には今、この鳥がコガネムシを捕えることを信じるべき十分な根拠があるのですが、もしヨタカが脚を用いて獲物のどこかを掴むのであれば、鋸状の爪が精妙に備わった中指を用いることをもはや不思議とは思いません。（P 37）

「ヨタカ」の飛翔を凝視し、採餌の瞬間におけるすばやい動作すら克明に捉えたこの一節は、簡潔な記述ではありながら、対象への徹底したこだわりの様子をうちあけている。細部にわたる記述の精度と率直に語られる発見の歓び。「ヨタカ」を介してすでに感知されたことではあるが、観察の現場におけるホワイトの視角をより厳密に理解するためには、「生活」はともかく、「習性」の語義と含意について再確認しておく必要がある。この言葉もやはり、「動物」の生に関するホワイトの認識を反映しているに相違ないからだ。

ここで特に留意すべきなのは、「習性」という訳語をあててきた“conversation(s)”という言葉の意義である。この言葉は無論、交際、社交等を意味するラテン語の *conversatio* を語源とするが、『オックスフォード英語辞典』（*OED*）を参照する限り、ホワイトの語用は直接には「世界ないし社会における身の処しかた。生きかた」を指示するものである。しかしながら、そこには「ある場所でもしくは人々の間で生きる行為、ないしは居場所を有するための行為」（*OED* 最終引用例一七〇五年）も意識されているように思われる。あるいはまた、ツバメ属の習性に関する「一種を除いて、すべてが私たちの家に喜んで愛着を示しますし、その渡り、歌、驚嘆すべき敏捷さによって私たちを楽しませてくれます」（B 15）といった記載から判断すれば、「他者と交わり、関わ

りを持つ行為。共生、交際、親交」（*OED*　最終引用例一七七〇年）といった、ラテン語の原義に近い含意があるらしいことも容易に推測される。

いずれにしても“conversation”からは語義の輻輳が感知されるが、とりわけ強調したいのは、そこに人間との類推作用が働いている事実である。「動物の生活と習性」にかかわる「ヨタカ」やツバメの実例は、明らかに擬人化への著しい傾斜を示すものだ。これをどう解釈するかは議論の分かれるところであろうし、自然をめぐる言語表象における十八世紀的な性格を無視してはならないのも当然であろう。ただ、特にホワイトの場合、自然界を構成する一員であると同時に独自の内実をも有する生物に注がれた関心、さらには共感が顕著に窺われるという側面を読み取りたい。「動物の生活と習性」がホワイトの歓びの感情を刺激せずにはいないからだ。ちなみにリチャード・メイビーは「『セルボーンの博物誌』が生の細目と多様性に対する賛辞であり、自然の〈細部にわたる事柄〉を謳う」ものだと評したが、妥当な指摘だと思われる。[8] そして、「動物の生活と習性」が「生の細目と多様性」につながるとすれば、もうひとつの重要な概念が自ずから浮上してくる。それが、「エコノミー」である。

あるとき、ホワイトは害虫駆除を話題として、「これらの動物［害虫］の属性、エコノミー、それに繁殖、要するに生活と習性について知識をもつことは、これらが行なう略奪を防止すべき何らかの手段を獲得するために必要な第一歩なのです」（P34）と述べた。あるいはウォルター・ジョンソンによれば、ペナント宛第二十八書簡の結びは当初、「動物の生活、習性、それにエコノミーこそ、博物誌の生命にして魂です」とされていたという。[9] ともかく、生物観察と関連づけてホワイトは「（自然の）エコノミー」（“oeconomy”/“oeconomy of nature”）、あるいはその派生語を計六回（P8、P17、P34、B35、B46、B48）用いており、しかも上の例が示すように、それらはしばしば「動物の生活と習性」と同一次元に配置される。

「（自然の）エコノミー」は神の創造とつながる概念として、十八世紀の博物誌における主要な論点のひとつであり、ホワイトも無条件に受容していたものである。「動物の生活と習性」と同様、これに対するホワイトの認識についても、リンネの場合と対比させて別の機会に論じたことがあるため、ここでは詳細を割愛する。[10] ただ、改めて指摘しておきたいのは、たとえば池で心ゆくまで安らいで時を過ごす「牛たち」（P 8）、「爬虫類の四肢」（P 17）、肥沃な土質形成に寄与する「ミミズ」（B 35）、「コオロギ」の興味深い生態（B 46）など、多くの事例をめぐって言及される「エコノミー」から窺われることが、複雑かつ精妙に構成された「生ける有機体として の自然観」[11] あるいは生物と環境との有機的関連に対する感覚――狭義の意味における現代生態学（エコロジー）の萌芽――のみにとどまってはいないということだ。「エコノミー」を〈神の摂理〉と連結させて捉えたように、自然のうちに神意の証を探るという十八世紀的な博物誌の使命のある部分に則っていたにせよ、ホワイトはこの概念のうちに、個々の生物が繰り広げる生そのものを育む原理を求めていた。そして「動物の生活と習性の研究」を通じて、その驚異に満ちた発現を日々眼のあたりにする。だからこそ、彼は「自然の領域に観察の余地は尽きることがありません」（B 4）と語らずにはいられない。新たな発見に驚異を覚えることで、「野外のナチュラリスト」ホワイトの内部では人間感情が生物の営みと交歓する瞬間を迎えるのだ。生物が繰り広げる豊かな生を知ることは、自らの経験を豊かにすることに等しい。「ヨタカ」に関する、もうひとつの観察例を挙げておこう。

この話を信じていただけるものと存じますが、近所の人たちと険しい丘の中腹にある庵に集まってお茶を飲んでいたときのことです。一羽のヨタカが飛んできて、その小さな建物の藁葺き屋根の十字架にとまり、鳴きはじめたのですが、それは何分も続きました。そして、その小動物の発声器官が働いている間、建物全体がそれと分かるほど振動するのを知って、私たちは皆驚きに撃たれたのでした。また、この鳥はときどき小さなキー

キーという声を出し、それを四、五回繰り返します。私が観察したところ、それは雄が戯れに枝から枝へと雌を追いかける際に起きるものでありました。（P22）

労を厭うことなく現象に拘泥し、その深部にまで貫入してゆく視線と対象に注がれる親密感にあふれたまなざしとの融合。彼の著作が博物誌の古典と位置づけられる根拠はひとえにこの点に求められる。それを保証する場こそ、言うまでもなく〈再定住〉の地、家郷セルボーンに他ならなかった。

四　セルボーン―〈教区〉と〈生態地域〉

『セルボーンの博物誌』の印象を語る際に、読者はしばしば「楽園におけるアダムの日誌」、「アルカディア的な調和」といった類の言葉を口にせずにはいられない衝動に駆られる。[12] ひとつの読みかたとして、それはごく自然な現象であろう。しかしながら、ホワイト自身はセルボーンという場所を決して抽象的存在として捉えてはいないし、空想と郷愁が錯綜するアルカディア的光景の舞台装置とするような作為に頼ってもいない。彼は、あえてセルボーンの価値を露骨な形で喧伝することを回避しているようにも思われる。だからといって、それはホワイトにとってのセルボーンの意義が減じたことを意味するものではない。彼の意識と記述のすべてが基盤とするのはセルボーンという場所であり、しかもそれらは究極的にセルボーンに結節点を求めてゆくからだ。かりに作為があるとするならば、彼は日常的に反復される観察の記録を蓄積することで、この場所に生きることの至福を読者の心に刻み込んでゆくという、着実な手法を選択したと言えるかもしれない。

かけがえのない場所としてのセルボーンの意義がホワイトの心に定着していったという想定を許容するであろう根拠は、何にもまして『セルボーンの博物誌』冒頭のペナント宛第一～第九書簡に求められる。この九通の書

簡には日付が記されていないこともあって、本書が上梓されたおりに著者が創作したものだというのが定説である。それらが加えられた直接の理由とは、「定住者」が寄与すべき「歴史と地誌にまつわる知識の境界の拡大」に踏み出すための前提としての役割が求められたことにあると考えられる。ただし、一読する限りでは、この九通はホワイトの記述の舞台となる村の歴史、地理、地形、景観、植生、個々の動植物、人々の暮らしなどを子細に紹介してはいるが、はなはだしく一貫性に欠ける冗長な記述の羅列といった印象を受けてしまうかもしれない。しかしながら、この書簡群を単に散漫な形式で終わっていると一方的に批判して片づけるのであれば、それらが反映するホワイトの真意、それらに託された彼のセルボーン観を完全に見逃してしまうことにもなりかねない。むしろ、冒頭に置かれたことにはしかるべき理由があるのではないか。それらが、ホワイト自身の独特の視座から切り取られた一個の世界としてのセルボーンの様相と内実を例示し、しかも以降の言説の枠組みを形成していると考えられるからだ。

では、創作書簡において、セルボーンとはどのようなものとして捉えられていたのであろうか。第二書簡にはとりわけ留意すべき一節が含まれている。

> 村の中心、教会の近くには人家に囲まれた四角い広場があって、村人からはプレスターと呼ばれています。この場所の中央には昔、幹は短くずんぐりした、大きく水平の枝をその場所の端まで届かんばかりに広げた、オークの巨木がありました。この尊ぶべき老木は石段とその上部の座席に囲まれておりましたが、老若を問わず、楽しみの源となり、夏の晩には多くの村人が集まる場となっていたのです。老人はここで腰をおろしては真剣な議論に没頭し、子どもは彼らの前で跳ね回ったり踊ったりしたものでした。

この、いかにも楽しげな光景を彷彿とさせる語りは村をめぐってさりげなく紹介されるエピソードのひとつに過ぎないが、その地の中心をなす場が湛える雰囲気を的確に伝えてくれる。それでいて、ホワイトの筆致は他の事柄を記述する場合と何の相違もきたしてはいない。認識と語りの手法において彼は人間と自然との間に隔たりを設けず、すべてをセルボーンという場所に現出する光景として把握していることになるであろう。その点からも、「村の中央、教会の近くに」ある「広場」に託された意義は極めて大きい。村人が教会に見守られつつ、幸せに生きる様子を通じて〈教区〉の存在が前景化されるからだ。そして、村人の生活はその本質において、ごく親しく接する「動物の生活と習性」と何ら不協和音を発することなく自然に同調してゆく。

〈教区〉(parish) の何たるかはここで改めて説明するまでもないが、『セルボーンの博物誌』を語る際には、しばしばこの〈教区〉に対する言及が行なわれる。主だったものを挙げるなら、D・E・アレンは、ホワイトが「自らの暮らす、地球のささやかな片隅に関する知識を深めることに満足し」ていたと述べたうえで、「セルボーンとは、私たちひとりひとりのうちに存在する密やかな、自分だけの教区なのである」と評した。[13] あるいは(牧歌的調和を謳う言説を強調し、ホワイトを現代エコロジー思想の源流に位置づけてみせた)ドナルド・ウスターによれば、「セルボーン教区にはどれほどの生物が含まれているかを知り、それらすべてがが相関関係のシステムにおいてどのように結びつけられているかを理解すること。これがホワイトの生涯にわたる計画」であった。[14] また、アレンの感情が籠った直截な言葉とばかりか、ウスターの指摘する「相関関係のシステム」とさえ密接に繋がる認識に基づきながら、ホワイトの日常に即した空間としての〈教区〉の意義を論じたのはリチャード・メイビーである。

〈教区〉とは、多大な意味が負荷された概念である。教区は単に地理や教会行政のみならず、忠誠心の歴史と

体系とも関わっている。私たちの大半にとって、それは私たちが帰属しているのだと感じる、定義不能でありながらも評価可能な領域なのだ。その境界は地図上の線である以上に、神に対する私たちの心の籠った忠実さが及ぶ範囲となっている。このような忠実さは常に人間と同様に野生生物をも包括するものであり続けたし、〈村〉の鳥たち―アマツバメ、ツバメ、それにイワツバメ―が毎年回帰するのを村全体が歓ぶという点においてこそ、最も明瞭にその本質を現わしているのである。私には、これらの鳥たちがホワイトのお気に入りであったことが単なる偶然だとは思われない。(15)

すでに述べたように、ホワイトは『セルボーンの博物誌』の枠組みに相当するペナント宛第一～第九書簡において記載事項から一切の差異を排除し、すべての話題を適宜織り込んでは同一次元に配置したが、それを許容する究極の根拠は〈教区〉をおいて他にない。だとすれば、ウスターの洞察や、メイビーが言う「地図上の線である以上」の「領域」を踏まえたとき、ホワイトによって前景化された〈教区〉の実質にはじめて接近できるように思われる。たとえセルボーンが基本的には人為的な行政区分であるにしても、そこに暮らし、博物誌研究に勤しむホワイトにとって、風土の特性を知り、動植物に関する知識を蓄積してゆく過程でその場所は単なる地理的存在から心理的存在へと変質を遂げるのだ。彼が見た〈教区〉とは、自身を含む村人と他の生物との一種の共有地に等しかった。人間だけが占有を享受するのではなく、あらゆる生物もそれぞれ個別の生を営むと同時に、人間の歓びといった感情を育むことをも含め、何らかの形で他と関わり合うひとつの場。換言するなら、セルボーンは、生命を有するものたちの親密なる連続性と関連性を表象する。冒頭の書簡群が出版を機に執筆されたことの意義を再度繰り返すとすれば、それは、生命共同体＝〈生態地域〉としてのセルボーン〈教区〉の現実態をホワイトの眼が目撃したままに標榜することにもあった。この場所は、まさしく「常に人間と同様に野生生物をも

包括」していたのである。

五　〈場所の感覚〉と博物誌―結びにかえて

これまで考察してきたように、『セルボーンの博物誌』は相互に関係し合ういくつかの要素を孕むことで成立している。しかしながら、全篇に通底するのはセルボーンという場所への揺るぎない信頼ではなかったか。「動物の生活と習性の研究」の継続が自然の細部そして「エコノミー」をめぐる深い洞察にまで至る経緯、あるいはホワイト自身が「野外のナチュラリスト」としての自己規定を獲得してゆく様態。それらのすべては結局、セルボーンに現実に生きるということへと収斂する。アレンの言葉を借用するなら、この著作においてホワイトは、「自らの暮らす、地球のささやかな片隅」に満足していることを語りかけてやまない。このような事態は、最終的に自己と場所との関係性に還元されてゆく可能性を秘めているのではないか。座標軸を変換することが許容されるなら、『セルボーンの博物誌』を、ひとつの場所に対する感受性の深化を記録するものとして読むことができるはずだ。では、この著作が現代の読者／生態地域主義、ひいては現代エコロジーの諸領域に強く訴えてくるものとは一体何に起因するのであろうか。

ホワイトの言説と関連させて、生態地域主義が掲げる〈再定住〉要請の基本となる了解事項をごく単純に図式化すれば、それは今も述べた通り、自己と場所とをどのように接続させるのかという問題へのこだわりに他ならない。そして、この問題の輪郭を把握するためには、〈場所の感覚〉(sense of place) を援用することが有効であろう。〈場所の感覚〉とは、生態地域主義といった特定のエコロジー思想のみならず、ネイチャーライティングや環境文学におけるキー・ワードのひとつであり、概念や含意をめぐっては議論がしきりに反復されるところでもあるが、その一端は、たとえばジョン・ダニエルの印象深いエッセイ「家路」("Trail Home,"1992) から

も読み取ることができる。自らを「迷走する原子」になぞらえるダニエルは「四〇年の人生で二十九番目の住まい」をサンフランシスコ近郊に定めた。そして、家の周囲の自然に親しみつつ「三度目の夏」を迎えた今、「家」の意味＝「心に土地を繋ぎ留める術」を予感して、こう語る。

雨の夜、カリフォルニアゲッケイジュの脇を慎重に歩いていくと、その芳香が、土と植物の混じり合った匂いを背景にして鮮烈に届いてくる。何も見えないままゆっくり進んでいくと、この小道が単なる通り道以上のものになっていく。ひとつの確かな場所になっていくのだ。しかも私たち自身がその一部になってしまっている。長くとどまれはしないところでありながら、充分に生を感じ、今ここにいる思いが間違いなくするのである。(16)

このような表現行為の背景には、当然、移民／移動国家としてのアメリカに特有の歴史と生活のありかたに対する反省がある。社会文化的伝統を根本から問い直し、ひとつの場所に腰を落ち着けることで自分自身の生の意味を模索してゆくこと。ダニエルのエッセイはこうした角度から読まれなければならない。しかしながら、動植物との交渉の濃密化と知識の集積、あるいは友人たちの暮らしぶりなどの丹念な記述に託された帰属感の醸成の過程には、さらに分節されるべき点もまた顕在していることは論をまたない。彼の視点は明らかに、現代における人間の自己認識と位置づけの方策と関わっている。最終的には地球規模で拡散するよう社会から仕向けられた人間の活動。そこで求められるべきは、このような事態が招来する自己疎外に深刻な問いを発する一方、自己のあるべき姿を模索するための何らかの基盤を獲得してゆくことであろう。〈場所の感覚〉はまさしく自己理解の再考を要請しているのだ。ちなみに、今日の優れたネイチャーライターのひとり、ウェンデル・ベリーは「自分がどこにいるかを知らなければ、自分が一体誰であるかはわからない」（“If you don't know where you are, you

don't know who you are”）と語っている。[17] この簡潔ではあるが含蓄に富む言葉は、自己を自己とする根拠が「生態系などの自然環境だけでなく、その歴史や文化をも含めた複合体」[18]である場所との関係性によって規定されることを示唆するものであろう。ひとつの場所で経験を蓄積することによって、はじめて人間は自らの生の実質を認識する契機を得る。〈場所の感覚〉とは、場所との関係において人間が自己同一性の再定位を指向する感覚の謂いに他ならない。

もはや説明不要であろうが、〈場所の感覚〉は生態地域主義が提唱する〈再定住〉と共鳴せずにはいない。すでに本稿の冒頭で触れたことを敷衍すれば、〈再定住〉とは〈場所の感覚〉を定位させるための有効な方法であるばかりか、地域特性に適合した形態による持続可能な生そして共同体を構築するための契機を表象しているのである。そして、なぜ特定の地域なのかについては、環境論の領域でも積極的な提言を繰り返す地理学者イーフー・トゥアンが傾聴に値する言葉を発している。その著書『トポフィリア』において〈愛国心〉を論じたおり、トゥアンはそれを「地域的なもの」と「帝国的なもの」に区分した。

> トポフィリアは、大きな領土に対して主張されると、偽物のように聞こえる。人間の生物学的な要求や、感覚に結びついた能力に見合うくらいに縮小された、こじんまりした大きさがどうも必要なのだ。そのうえ人々は、ある地域が自然な単位に思えるときには、もっと容易にその地域と自己とを同一視することができる。愛着を帝国全体に及ぼすことはできないのだ。なぜならそれは、力で一つにまとめられた異質な部分の集まりであることが多いからである。対照的に、故郷（*pays*）には歴史的な連続性がある。それは、個人的に知ることができるぐらい小さな、地形的な単位（谷や、海岸や、石灰岩の露頭）であるかもしれない。[19]

当然のことながら、トゥアンの発言は、人間の生を人間が位置する具体的な空間―「こじんまりした大きさ」の「地域」―からは分離しえないという認識を前提としている。彼が指摘する「愛着」とは、特定の「地域」に住むことによって生じる個別的で個人的な、しかも真実性を保証された感覚なのである。環境理解が観念である限り、その実体は曖昧なままで終わってしまいかねない。しかしながら、「個人的に知ることができる」場所や環境は人間に対して、たとえどのような種類のものであるにせよ、とにかく何らかの作用を及ぼさずにはいない。そして、その意義と効果は心のうちに確実に定着してゆく。人間と場所との情緒的な繋がりに焦点をあてたトゥアンの議論は生態地域主義の基層と通底するばかりか、その「露頭」とも言うべき古典的な現われを『セルボーンの博物誌』に見い出すであろう。ホワイトの「トポフィリアは、それが宗教的な愛や科学的な好奇心と結び付いた時、現実の環境によって、豊かな生命を吹き込まれ」たのである。[20]

ホワイトの営みは、特定の場所との関係を重視する生態地域主義の方向をより厳密なものにするうえでも、常に立ち帰って参照すべきほど大きな比重を占める。ひとつの場所がホワイトの言葉で正確に定位されたからだ。分類・体系化に終始することなく、精緻な観察と個人の感情とを微妙に融合させたホワイトの記述は、彼がごく自然な形でセルボーンへと帰属してゆく過程で生じた精神の運動によって裏うちされている。それ自体が研ぎ澄まされた〈場所の感覚〉を示すと同時に〈再定住〉の軌跡を描く『セルボーンの博物誌』はそうした側面においても、場所を知ることに関する規範となりうる。しかも、個としての人間が同一空間を共有している動物に具現された自然と直接対峙するホワイトの博物誌研究は、人間と自然の関係のありかたに向けて構築されたひとつの視座を鮮烈に示す点で、現代エコロジー思想全般に対しても決して無視できないほどの説得力を有していると言える。たとえば、ホワイトに直接言及してはいないものの、ミッチェル・トマショウは生態地域主義における博物誌的知見の意義を掲げて、次のように呼びかける。それは、即座に『セルボーンの博物誌』という仕事を想起

させずにはおかないものだ。

鳥たちの言葉に耳を傾けよ　言葉と風景を結んでひとつにせよ。植物相、動物相、景観、天候の研究を日常の実践とせよ。いかなる種が共同体を分かち合っているかを知ること。今、ただ通り過ぎているだけのものが誰であるか、そしてどこへ行くのかを知ること。生態系から学べ。精神と魂を蘇らせるための、種の多様性に敬意を表するための、そして共同体の概念を拡大するための手段として、野生生物と風景について話を語れ。絶滅の危機に瀕した知であることに断固として終止符を打つべく、博物誌を集団的な記憶の地位に復帰させよ。[21]

生態地域主義は現代社会にパラダイム変換の必要性を問いかけている。ただ、その主張は決して過激なものでも達成不能なものでもない。環境に対して責任を負うことができるような共同体の生活、社会あるいは文化の継続が特定の場所に深く根をおろしてようやく実現する可能性が見えてくるという、ごく素朴な（そして、過去の歴史の大半において各地でひろく継承されていたであろう）認識を実践に接続させるというのだ。そしてホワイトは、そのような生態地域主義が進むべき道筋のある部分をすでに十八世紀において照射してくれた。時代の脈絡を度外視して「工業化の堕落と社会の断片化への批判」[22]とまでは断言できないにしても、である。ともかく、『セルボーンの博物誌』は単なる郷愁や回帰願望のうちに祭られるべきではない。今日、人間と自然、環境といった困難な課題と向き合う際に、「絶滅の危機に瀕した」とみなされがちな博物誌が、実はどれほど多くの可能性―いまだに（あるいは現代であるがゆえに、再評価に値する）有効な回路―を孕んでいるかを例証しているのだから。

註

(1) 山里勝己 247 は、Bioregionalism を「語源なものを強調すれば『生命地域主義』、生態系と人間との関わりを意味する思想・運動という観点で考えれば『生態地域主義』と訳することができよう」としている。筆者自身は、そのように明確に二分して了解することにはためらいを覚える。しかしながら、どちらかといえば後者の意味を積極的に受容したいという理由から、本稿では山里にならって「生態地域主義」を用いることにする。

(2) Aberley, 22−23.

(3) Aberley, 13.

(4) Aberley, 23.

(5) White, 3.

(6) 以降、Pはトマス・ペナント宛、Bはデインズ・バリントン宛の書簡を、また各数字は書簡番号を示す。

(7) 『金沢法学』四一・二（一九九九年）所収の拙稿、「〈動物の生活と習性〉―『セルボーンの博物誌』序説」を参照されたい。

(8) Mabey (1986), 5.

(9) Johnson, 28.

(10) 『金沢法学』四二・二（二〇〇〇年）所収の拙稿、「『セルボーンの博物誌』における〈自然のエコノミー〉」を参照されたい。

(11) Coates, 80.

(12) たとえば、Allen, 50 ; Coates, 191 ; Worster, chap. 1 など。

(13) Allen, 50-51 .

(14) Worster, 7.

(15) Mabey (1977), xvii.

(16) ダニエル 110−111.

(17) ステグナー 112−124 を参照。

(18) 山里 246.

(19) トゥアン 175−176.

(20) トゥアン 212.

(21) Thomashow, 130.
(22) Thiele, 269.

引用文献

Aberley, Dough. "Interpreting bioregionalism : A story from many voices." *Bioregionalism*. Ed. Michael V. McGinnis. London : Routledge. 1999. 13－42.
Allen, David E. *The Naturalist in Britain : A Social History*. London : Penguin. 1976.
Coates, Peter. *Nature : Western Attitudes since Ancient Times*. Cambridge : Polity. 1998.
Johnson, Walter. *Gilbert White : Pioneer, Poet, and Stylist*. London : John Murray. 1928.
Mabey, Richard. "Introduction." *Gilbert White : The Natural History of Selborne*. London. Penguin. 1977.
——. *Gilbert White : A Biography of the Author of THE NATURAL HISTORY OF SELBORNE*. London. Century. 1986.
Thomashow, Mitchell. "Toward a cosmopolitan bioregionalism." *Bioregionalism*. Ed. Michael V. McGinnis. London : Routledge. 1999. 121－132.
Thiele, Leslie P. *Environmentalism for a New Millenium : The Challenge of Coevolution*. New York : Oxford UP. 1999.
White, Gilbert. *Gilbert White : The Natural History of Selborne*. Ed. Richard Mabey. London : Penguin. 1977.
Worster, Donald. *Nature's Economy : A History of Ecological Ideas*. 2 nd ed. Cambridge : Cambridge UP. 1994.
ウォーレス・ステグナー「場所の感覚」(結城正美他訳)『フォリオa』2 ふみくら書房 1993. 112－124.
ジョン・ダニエル「家路」(生田省悟訳)『フォリオa』2 ふみくら書房 1993. 100－111.
イーフー・トゥアン『トポフィリア 人間と環境』(小野有五・阿部一訳) せりか書房 1992.
山里勝己「場所の感覚」／「生態地域主義」『たのしく読めるネイチャーライティング』文学・環境学会編 ミネルヴァ書房 2000. 246／247.